

2019年1月23日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 金 知妍
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 在日韓国人ニューカマーのエスニック・ネットワーク
—首都圏在住者を中心に—
論文題目（英文） Ethnic Networking among Korean Newcomers to Japan:
A case study in the Tokyo Metropolitan area

公開審査会

実施年月日・時間 2018年11月28日・12:00-13:00
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第1会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	森本 豊富	Ph.D. (Education)	UCLA	移民研究
副査	早稲田大学・教授	西村 昭治	博士（人間科学）	大阪大学	教育情報科学
副査	早稲田大学・准教授	原 知章	博士（文学）	早稲田大学	文化人類学・民俗学
副査	下関市立大学	木村 健二	博士（経済学）	東京国際大学	経済学

論文審査委員会は、金知妍氏による博士学位論文「在日韓国人ニューカマーのエスニック・ネットワーク—首都圏在住者を中心に—」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 エスニック集団の研究では教育現場におけるネットワークに関する研究も多いが、韓国人ニューカマーについても首都圏でそのような学校はないのかとの質問があった。

この質問に対しては、新宿区に東京韓国学校があるが、教育現場でのネットワークについては本研究では十分に調査していないと応じた。ただし、教会活動の中に教育的なネットワークも見受けられたので、今後、教育的側面も注視したいと答えた。

- 1.2 集団間の距離感に限らず世代間の距離感もあるのではないかと問いがあった。
この問いに対して、参与観察では、オールドカマーはニューカマーからの一定の尊敬を求めている点が見うけられた。世代間についてもさらに調査を進めていきたいと回答した。
- 1.3 ITネットワークの集団間的機能の有無についての質問があった。
この質問に対して、I I J (IT in Japan)に属する調査対象者は、集団内的機能は認められるが、集団間的機能については、ほとんどが初期滞在者であることから、オールドカマーに対しても、また、日本人社会にも距離をもって接していると答えた。
- 1.4 オールドカマーの団体である民団とニューカマーの韓人会との不定期な会合以外にも新大久保の「文化センターアリラン」など、日本人も加わったかたちでの事例についても調べれば研究の深みが増すと指摘があった。
これに対して、「文化センターアリラン」を訪問するとともに、今後の研究課題としたいと回答した。
- 1.5 エスニック組織としての民団と韓人会との関係性は、内紛と葛藤がある一方で双方が歩み寄る姿勢も見られるとの記述があるが、この点について確認したい旨質問があった。
この質問に対して、韓人会側に歩み寄りが見られるが、その時々リーダーの姿勢や方針によって変化するため、流動的な関係性であると答えた。
- 1.6 本研究の宗教的ネットワークについては、カトリック東京韓人教会を対象としているが、プロテスタント教会に関する先行研究との相違点についてはどのような点が指摘できるかとの質問があった。
この質問に対して、プロテスタント教会に関する先行研究においては機能面について類似していることが報告されているが、日本人との関係性については先行研究では扱われていないと回答があった。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。
- 2.1.1 エスニック集団、エスニック・ネットワーク、コミュニティという表現が使われているが、本稿でのコミュニティの定義などについて注の中で触れた方が良い。
- 2.1.2 第2章のI I Jに関する章で「住み分け」という表現が項目タイトルに使われているが、意味が不明確なので再考を促したい。
- 2.1.3 I I Jについても、教会や韓人会の場合と同様に、集団内的機能、集団間的機能について整理し論文全体の整合性を保つようにした方が良い。
- 2.1.4 本研究と先行研究との比較の中で、相違点や新たな発見などについて、さらに踏み込んだ記述があることが望ましい。
- 2.1.5 誤字脱字や本文で引用されている出典が参考文献リストと一致していない点などの形式面を整えてほしい。
- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求

を満たしているとは判断された。

- 2.2.1 本稿では、エスニック集団とエスニック・ネットワークに関する定義は示されているが、エスニック・コミュニティに関する定義は記述されていないため、注で説明を加えた。
- 2.2.2 当該章の内容をより明確に表すために「住み分け」という表現を削除し、「集団間的機能」の項目に含めて記述した。
- 2.2.3 I I Jの事例についても、集団内的機能と集団間的機能に分けて、新たに項目を立てた。ただし、初期滞在者が多数であるため、集団間的機能に関しては現時点で明らかになっている点に限り加筆した。
- 2.2.4 先行研究との相違点や本研究の当該専門分野における貢献について、終章で加筆し明らかにした。
- 2.2.5 論文全体を見直し、誤字脱字や本文の引用文献、参考文献リストなどについて修正し形式面を整えた。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は、首都圏在住の在日韓国人ニューカマーを対象に、ニューカマーたちが日本社会で暮らしていく上でどのようなネットワークを形成しているのか、また、その機能にはどのようなものがあるのかを（1）IT関連のI I J、（2）カトリック東京韓人教会、（3）在日韓国人連合会（略称、韓人会）の三つの事例を中心に検証したものである。その目的は明確であり妥当性があると評価できる。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：調査方法は、インタビュー調査、参与観察を中心とした質的研究であり、約3年間かけて25名の調査対象者について調査を実施している。分析方法については、ネットワーク論を軸に分析し、集団内的機能と集団間的機能に区分して検討しており、明確であり妥当性がある。なお、本調査ではインタビューや参与観察がなされているが、十分なラポールを構築した上で対象者から許諾を得ており、必要に応じて匿名性は保たれていることから倫理的な配慮が十分になされていると認められた。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：3つの事例を通して次の点が明らかになった。すなわち、第2章のIT技術者のサイバーネットワーク（I I J）では、8人からの聞き取りを通じて生活面での相互扶助、職場での悩みや相談など生活の安定と安寧をもたらす機能があることを指摘している。第3章の宗教ネットワーク（カトリック東京韓人教会）では、神父、シスターと信徒8人からの聞き取りによって、集団内的機能として冠婚葬祭などの扶助の役割の他に、ミサ後の食事会や年中行事としての運動会などを通して相互扶助的な関係が構築されているという。集団間的機能としては定期的なボランティア活動などを通じて地域社会に対して寄与する機能を果たしていると述べている。第4章の在日韓国人連合会に関しては、9人の聞き取り調査をもとに、集団内的機能としては法律相談やコリアン・フェスティバルなどの多彩なイベントを通して相互交流とサポートとしての役割を果たしていることが明らかにされている。

集団間的機能としては、日本社会との関係においてスピーチコンテストや清掃活動などで日韓関係の改善に寄与し、オールドカマーの民団とは指導者間での話し合いがもたれているが、いずれも克服すべき障壁がある点が指摘されている。

3.4 本論文の独創性・新規性：

3.4.1 近年、日本では IT 技術者への需要が増している。そのことに対応して創設されたサイバーネットワークとしての I I J に着目することで、所属感や信頼関係といった心理的安定感に関わる機能、また、「弱い紐帯」から「強い紐帯へ」という「結び目」に関する機能の変化を提示したことは注目に値する。

3.4.2 調査者本人の母語である韓国語、日本語を巧みに使用することによって、在日韓国人ニューカマーのコミュニティに深く入り、韓人教会のミサや韓人会の清掃活動にも関わるなどしてイーミック (emic) な調査を敢行した点が評価できる。

3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：

3.5.1 教会活動や総合的エスニック団体に関する調査に加えて、新たな展開としての IT 関連のネットワークに着目した点で在日韓国人ニューカマーの多面的ネットワーク形成が明らかになったことに学術的意義が認められる。

3.5.2 韓人会ネットワークに関しても、民団などオールドカマーとは区別される組織として、同一エスニック集団内での葛藤のみを強調する定説などについてネットワーク論という枠組みから再構成した点として学術的意義があるといえる。

3.5.3 近年増加傾向にある在住外国人の事例研究として韓国人ニューカマーを取り上げたことにより、オールドカマーとしての在日韓国人との相違点が明確になった点において社会的意義が認められる。

3.6 本論文の人間科学に対する貢献：

本研究では、日本社会におけるエスニック・マイノリティの事例研究として、外部観察者としてのエティック (etic) な視点に加えてコミュニティの内側からのイーミック (emic) な観点から人間観察を行った。集団内・集団間のネットワークのメカニズムと社会心理的側面を明らかにし、人間科学の学際的進展に寄与したといえる。

4 本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

金 知妍 (2015) 「在日韓国人ニューカマーのエスニック・ネットワーク：IT 技術者を事例に」『比較文化研究』 119 号, 193-202. (第 2 章に掲載)

金 知妍 (2016) 「在日韓国人ニューカマーにおけるエスニック教会の社会的機能：カトリック東京韓人教会を事例に」『比較文化研究』 123 号, 59-67. (第 3 章に掲載)

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上